

5月14日(日)

先着200名様に
カーネーション1本プレゼント!

Happy
Mother's
Day

あれこれ食べたい



おかんまき

1パック

1,200円(税込)



お母さんへ

僕が生まれてから23年になりますね。正直まだ大人になっただなんて実感湧きません！学生時代には沢山迷惑かけたり、沢山泣かしたりしましたね。西田鮮魚店で働き出しても5年という月日が経ちました。しんどい事、辛い事、悔しい事、感動した事、楽しい事、沢山ありました！5年間働けるのは職場の先輩方や色々な方達が側に寄り添って支えてくださったからです。

でもやっぱりお母さんが居るからこそ仕事も遊びもできる命がここにあります。本当に産んでくれてありがとうございます！

僕の母は海鮮巻きが大好きなんですよね。海鮮巻きを食べた母の幸せそうな顔を見ると僕は嬉しんです！僕も海鮮巻きが大好きなんです。ネギトロ巻きとサラダ巻きがめっちゃ大好きなんです！

そこで今回母の大好きな海鮮巻きと僕の大好きなネギトロ巻きとサラダ巻きを一緒に楽しんで貰う為に店長に相談して、広告出す事になりました。

西田鮮魚店 西浦 龍矢

西田鮮魚店

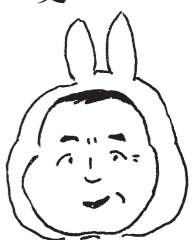
72-5246

御用聞き便専用番号 090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

『母』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



70年前の5月。母は私を産んだ。

その日、母の実家の西城で母の父親が息を引き取った。私の祖父である。母には、そのことを知らせなかったそうだ。ものごころ付いて私は思った。「僕はおじいさんの生まれ変わりなんじゃなかるうか」。祐宗小三郎の。

母は、幼くして母親を亡くし、『母』を知らない。8人兄弟の末っ子。ただし、上の3人は先妻の子。いきさつは知らない。

一緒に暮した兄妹は正志・悟・義美・フジエと母ユキ子の5人。

長兄の正志は南方戦線で戦死している。軍服をまとい、軍刀を手にした若き将校の伯父は端正な顔立をしている。「正志兄さんは頭がよかった」と、よく話していた。字こそ違いますが私と同じ名前。妙な感じがした。そうか、頭がよかったのか、自分もがんばらなければ、と。

フジエ伯母は、母の5つか6つ上だったろう。よく似ていたが、母をふたまわり大きくしたような人だった。母にとっては母親がわりのような存在だったようだ。「おねえちゃん」と呼んでいるのだが、そんなふうに見えた。結婚して名古屋に住み、私たちは名古屋のおばさんと呼んでいた。私たちが、まだ幼かったころ、その名古屋の伯母さんからミルク飲み人形が姉に送られてきた。真っ白のドレスを着た大っきなフランス人形。びっくりした。あのころの我が家には不釣り合いだったから。今でも目に浮かぶ。

悟伯父は、少し障害があつて、西城の家に行くと、いつも炬燵にすわり「よう来た、よう来た」と言つてにこにこしてばかり。未だにあんな柔らかな笑顔に出会つたことはない。

義美伯父が、そんな悟伯父の面倒を見ながら祐宗家を守っていた。母は「兄さん、兄さん」と頼りにしていた。ある晩、電話がかかつてきて、母が泣き崩れた。義美伯父が自転車で土手から落ち、片足を切断しなければならなくなったという。あれから伯父は義足になった。この義美伯父が『新鮮市場』の祐宗店長のおじいさん。

私がひと年とり、亡くなった父の代わりに葬式や法事に向くようになって気づいたことがある。

母が違うのだ。祐宗家の集まりに出るときの母は、なんとなくか貫禄があるのだ。ふだんは、あまり目立たない母が、おとなしめに坐っている母が、違うのだ。

まわりの人を呼び捨てにするし、まわりの人も一目おいてるのがわかる。それはそうだろう。こどもの時を一緒に過ごしたいとこたち、そして甥っ子や姪っ子がいる。

そうか、母は、その時、『祐宗ユキ子』に戻っているのだ。私知らない『祐宗ユキ子』に。私は『西田ユキ子』しか知らないのだ。いや、待てよ。私は『西田ユキ子』のことだつて、どれだけ知っているのだろう。

母は大正14年生まれ。西城に生れた。

こどものころは、川で泳いでいた。河童みたいに泳ぎが得意だった。

汽車に乗って女学校から帰ると、家が全焼していた。

高峰三枝子の大ファンだった。

戦時中は呉の海軍病院で看護婦だった。原爆のあと、広島

の町にも入った。

父とはお見合い。横山旅館で式をあげた。同い年の2人は23才。

結婚前の母のことをほんとに知らない。

私が23才のころ倉本聡脚本の『前略おふくろ様』というドラマに夢中になった。シヨウケンが演じる『さぶちゃん』がよかった。ピラニア軍団の室田日出男と川谷拓三も面白い味出してた。坂口良子がまた……。まあ、そんなことはどうでもいいが、毎回、ドラマの冒頭でシヨウケンが「前略おふくろ様……」とつぶやくことから始まる。

ある回で、自分がお母さんのことを何も知らない。お母さんにも若い時があつたはずで……。と始めた時があつた。その時、ぎくつとした。「そうか、かあちゃんにも若い時があつたんじゃ。今のわしのように、あくじゃ、こくじゃと悩むことが……」。

23才。青春真っ只中。いいことも、悪いことも、とにかく毎日あつた。いろんなことがあつた。エネルギーはあつたが、しんどかった。かあちゃんだつて。

27才で私を生んだ母は、あのころ50才。70才になった私から見れば、あのころの母も若いけど。それはともかく「かあちゃんにも23才の時があつたんじゃ」と気づいた。

だからといって、母に何かを尋ねたわけでもないし、たとえ尋ねたとしても、母のことだから、笑つてやりすごしたと思うけど、でも、こうして亡くなって、『母の日』にあらためて母のことを考えると残念な思いにかられる。

母は我慢する人だった。

5人の子を産んだ。一恵・晴俊・私・善彦・篤生。晴俊は生後一週間で亡くなった。母は、晴俊が息を引き取るまでずっと、膝の上に抱いていたと、誰だったか教えてくれた。晴俊の命日は6月30日。翌年5月私は生まれた。晴俊の分まで背負っているような気がした。

母が暗い顔をしていることがあつた。決まって私たち子ども心配だった。母が晴俊の話をするのを聞いたことはない。でも、それだけに……。

享年94才。人生をみごとに生き抜いた母に、『ありがとう』を伝えたい。

